

世界各地に伝承されたジャータカ集成書

田 辺 和 子

(一) ジャータカのはじまり

ジャータカとは、仏教に於いて、仏、菩薩の前生物語あるいは、それを集めた經典のことで、インドの各地に伝わる説話、昔話、寓話、たとえ話を仏や菩薩の前生の話として、「現在物語（過去世のことを語る由来の現在の話）」、「過去世物語（現在世のことが起こる過去世の由来を説く本生物語）」、「結合のことは（現在世と過去世を結びつける部分）」の三部構成の形式で作られる物語集である。漢訳では、ほんじょう 本生、ほんじょうきやう 本生經、しやうきやう 生經、本生話等となっている。そして現存している、パーリ語で書かれている仏教聖典の内の經藏五部（長部、中部、相應部、増支部、小部）の「小部」經典の中に、二二篇五四七話から成る、ジャータカという集成書が含まれている。「小部」經典中のジャータカの主文の「過去世物語」は、「昔々」を意味する、「パーリ語」 *atthi* で始まる物語である。

ジャータカのはじまりは、紀元前三世紀以前の原始仏教時代と考えられている。原始仏教時代に既に仏から教えられた仏の教説を弟子や信者達が、詩や短い散文で、スッタ（經）、ゲイヤ（重頌）、ヴェイヤーカラナ（問答体）、ガーター（詩）、ウダーナ（感興偈）、イティヴウッタカ（出来事）、ジャータカ（本生物語）、ヴェーダツラ（定型句の問答体）、アッブダダンマ（未曾有法）などの九分教（くぶんぎやう）と呼ばれる文学形式でまとめたものが作成され、記憶によって伝えられたのである。この中にジャータカが含まれている。

さらに、パーリ語で書かれている仏教聖典の、長部經典 (DN)、中部經典 (MN)、相应部經典 (SN)、増支部經典 (AN) の中に「現在物語」、「過去世物語」、「結合のことば」の三部構成から成る物語が散見されるが、この中の「過去世物語」の始まりの言葉の「昔々」に相当するパーリ語は、*atthē*ではなく、パーリ語として古い形の *bhūtapubbān* が用いられている。*bhūtapubbān* は、相当漢訳經典では、「往昔」、「乃往過去」「過去世時」等が用いられている。この *bhūtapubbān* の後に続けて、「現在物語」、「過去世物語」、「結合のことば」の三部構成の内の釈尊の「過去世物語」が語られている。この三部構成の釈尊の物語が、ジャータカの始まりの物語ではないかと思われる。例話は以下の通りである。

ジャータカのはじまりの例話

例話 1 ガティーカーラとジョーティバーラ (過去仏迦葉仏時代の話)

(MNII p. 45, 1.11-p. 54, 1.19)

「現在物語」

世尊 (釈尊) が微笑されたのを見た阿難尊者が、不思議に思ってなぜ微笑されたかを尋ねたのに対して、世尊が説明を始められた。

「過去世物語」

「昔々 (*bhūtapubbān*)、この町に迦葉仏が出現していた。迦葉仏の信者にガティーカーラという陶師がいた。彼は

親友のジョーティパーラ（過去世の若い釈尊）を迦葉仏のもとに誘ったが、行こうとしないので、頭髮をつかんで連れて行こうとした。あまりにも熱心なので友の言うことに従ってジョーティパーラは、迦葉仏の教えを聞き、出家した。陶師のガティーカーラは、盲目の老両親を扶養するため出家することができなかった。

またカーシ国の王が迦葉仏のもとで教えを聞き雨期中の招待をしたが、迦葉仏は既にガティーカーラの招待を受けていると言って断った。そして迦葉仏は、『ガティーカーラは、仏と法（教え）と教団を意味する三つの宝（三宝安んぼう）に絶対の信を置いており、父母を養っており、将来必ず涅槃に入る者である』と記別（きべつ）を与えられた。」と世尊は語られた。

「結び」

世尊は、「この時のジョーティパーラは、私であった。」と言われた。

（この話は授記（じゆき）の話を含んでいるジャータカの始まりの話である。釈尊がご自分の前生の時の友人が深く仏教を信奉していても仏の教えを聞くのをいやがる自分を仏の教えに導いてくれたこと、その友人は当時の仏から必ず涅槃に入る者であると授記（予言）されている者であった。このように釈尊が説法の中でごく自然に自分自身の前生の出来事をふと思い起こして話題にしたこともあったものと思われる。）

例話2 仏の最後の旅に於いて語られた、転輪王大善見王の話

(MNII p.45, I. 11~p.54, I.19)

「現在物語」

仏（釈尊）が故郷のカピラヴァットゥに向かう最後の旅で、いよいよ病が重くなってクシナーラーで命終えようと言われた時、お供の阿難尊者は、「こんな辺鄙なところで亡くならないでもっと大都市で亡くなってください。」と懇願した。釈尊はそのことをさえぎって言われた。

「ここが小さい町だなどと言ってはいけない、阿難よ。」

「過去世物語」

「昔々 (*bhūtapubbam*)、ここはクサーヴァティーという名で、大善見王という転輪王の都だったのだよ。その時の町は非常に栄え、人々が集まって、にぎわっていたのだよ。阿難よ。」

「結び」

その時の転輪王の大善見王は、実は私だったのだよ。」と釈尊は言われた。

（このような出来事が最晩年の釈尊の姿として伝承されている。この時にもクシナーラーを説明するのに釈尊が、転輪王であった時の自分の前生を阿難尊者に語っているのである。）

bhūtapubbam で始まる釈尊の過去世物語については、他に DNI, p.134, I.21~p.143, I.27, DNII, p.230, I.22~p.25, I.11, MNII, p.74,

124-p.82.18 等が見られる。この聖典の中に見られる、釈尊についての「現在物語」「過去世物語」(bhūtapubbāṇi)ではじまっている本文「結び」の三部構成の話は、ジャータカのはじまりの物語であると思われる。

(二) パーリ聖典小部經典中のジャータカ

釈尊在世中には、弟子達は釈尊の人柄に触れて、釈尊から親しく指導を受けることができた。釈尊が目のおられた時には釈尊のことばを通して仏の教えを理解し、信頼し、尊ぶことができた。釈尊が亡くなった後も、直に教えを聞いた弟子達が多く生きている内は、釈尊の人柄と教えをその弟子達から聞いて釈尊の実像に近付くことができた。しかし釈尊がこの世にいらなくなって時がたつと、釈尊に直に教えを受けた人が少なくなり、人々は釈尊その人の人となりがわからなくなっていった。そしてただ想像のみ、その人柄を知ることになって仏教を奉ずる人々の間では、釈尊は人ではなく釈迦仏という特別な存在と思うようになっていった。何か人ではない超越した人というイメージが高まって神秘的な存在という考え方ができていった。

そういうところからそのような超越した人格をもつ人は、この世に生まれてくる前にも立派な存在だったという考え方が出てきた。釈尊は生まれ変わり死に変わりの中で様々な生き物になって生まれて立派な行為をくりかえして他の衆生を救い導き、悟りを開いて仏となることができたと考えられるようになっていった。

こうしていくつも釈尊の前生物語が作られていったものと思われる。さまざまな生き物に生まれかわって立派な行為を行ったと考えられているので、人間として生まれているばかりではない。あるときは、樹神となったり、あるときは帝釈天として生まれていたり、動物となって生まれていることもある。人間となっている場合にもあるときは

王であつたり、あるときには修行者であつたり、時には、主人公としてではなく助言を与えて世の中を正しく導こうとする者であつたりしている。

ジャータカの中で語られている話は、いずれもすがすがしい話が多く、自分の身におきかえて反省させられて身をひきしめる思いを持つことも多い。また知らず知らずのうちに物語の中で述べようとしている教えに頭を垂れる思いになる。例話を示してみることにする。

パーリ聖典小部經典中のジャータカの例話

ジャータカの例話Ⅰ ジャータカ三六一

山中に棲むライオンとトラとジャッカル (Vaṇṇārohaṇātaka)

「現在の出来事」

世尊（釈迦）が祇園精舎に滞在しておられた時、世尊の高弟の二人の舍利弗尊者しゃりはつそんじやと目連尊者もくれんは、雨期（雨季）が三か月程続く。世尊をはじめとする仏教の修行者達は遊行者であつたが、雨期の間は、彼等は遊行せず一定の場所に留まって生活をしていた。）の間を二人だけで辺境の村に近い森の中で住むことにした。彼等は辺境の村に托鉢に行つて食事を得て生活していた。こうして舍利弗尊者と目連尊者は、もともと幼なじみの親友だったので互いに互いを尊びながら雨期を過ごしていた。

ところが一人の男が彼等のそばに住みついて彼等の食べ物の残り物をもらつて生活をするようになった。この男は二人を仲たがいさせようとして二人の耳元で相手が悪口を言っていると告げ口をした。しかし二人ともそれに取り合

わずかえってその男を追いつ出してしまった。

雨期が終わった時に二人はこの出来事を世尊に報告した。すると世尊は、「そなたたち二人にとってこのようなことが起こったのは今だけではないよ。以前にも同じようなことがあったのだよ。」と言われて過去の物語を話された。

〔過去世物語（主文）〕

昔、バーラーナシーでブラフマダッタ王が国を治めていた時、森の中に一本の大きな木が立っていてそこには木の精霊が住んでいた。その木の脇の大きな洞穴に一頭のライオンと一頭のトラが仲良く一緒に暮らしていた。彼等は身体が大きく立派でしかも姿がみごとで二頭が連れ立って森の中を歩くと威風堂々としていて他の動物達は、みんな恐れてこそこそと隠れるようにしていた。

二頭は、お互いに相手をおもいやり、しかも互いに相手のすばらしさをみとめ、一目を置いて尊敬と信頼をもつて穏やかにくらしていた。

ところがそこに一匹のジャッカルが棲みついて彼等二頭の獲物の食べ残しを食べて生活するようになった。このジャッカルははじめやせこけていたが、彼等の食べ残しを食べるようになるとまたく間に栄養が体中にゆきわたって毛並みもよくなり太っていった。二頭は、お互いに相手をおもいやり、しかも互いに相手のすばらしさをみとめ、なかよく穏やかにくらしていた。

ジャッカルは、はじめはこんなにうまい獲物にありつけるなんてありがたい、二頭がそれぞれ獲物をとってくるから食い切れない程だところこんでがつがつ食べていたが、それがいつものことになると当たり前になって恐ろしいこ

とを考えるようになった。「いろんな肉を食ってきたけど食べ飽きた。まだライオンとトラの肉は食ったことがない。そうだ。あいつらの仲を引き裂いてけんかさせてやろう。そうすればあいつらは死ぬまでたかうだろうから、どっちも死んでしまっだろう。そうになったら、あいつらの肉が食える。」

こう思ったジャッカルは、ライオンを尋ねて言った。

「ねえ、ライオンさん、あなたとトラさんとの間で何かありましたか。」

「どうしてか。」

「それがね、トラさんは、こう言うんですよ。お前さんどう思うかい。俺様のほうがライオンの奴に比べて立派だろう。力も強いし、見た目も立派だし、勇気も一段と俺様の方があるぞ。そうだろう。こう言ってあなたをけなすのですよ。わたしもそれを聞いてこまっちゃうんですよ。」

このことばを聞いたライオンは、電光石火でんこうせっか一声大声を出して言った。

「お前は出て行け。」

そして続けて言った。

「我々は長いこと互いをみとめあい思いやりながらお互いに助け合って暮らしてきたんだ。俺は、あいつのことをよく知っている。そんなことをあいつは言うはずがない。出て行け。」

次にジャッカルはトラを尋ねてライオンに言ったのと同じことを言った。トラもはじめはそんなはずはないと思ったが、ジャッカルから何度も言われるとひよつとしたら、と思つてライオンに尋ねた。

「姿のよさと大きさ、生まれと力強さ、そして勇敢さの点で

トラは私程すぐれていないと、君は言ったのかい、ライオン君よ。」

ライオンは答えた。

「トラ君、君こそ、姿のよさと大きさと、生まれと力強さ、

そして勇敢さの点でライオンは私程すぐれていないと、言ったのかい、

そう君が言ったとジャッカルが言っていたよ。

君を信頼して暮らす僕をこんなふうに疑うなら

もう僕は君と一緒に住めないよ。

他人のことはをそのままに鵜呑みにする人は

すぐに友情を破り、うらんだりするだろう。

いつも心をつかい、仲間割れを心配し、

欠点ばかりを見つけ出す、そんな人は、友だちなんかじゃないよ。

幼子がお母さんの胸の中にやすらうようにその人の胸の中でやすらえて

他人によって仲を裂かれることのない、そんな人こそ友じゃないのか」(太字は偽文)

ライオンがこう言うと、トラは少しでもライオンを疑った自分を恥ずかしく思つて頭を垂れてこう言った。

「僕が悪かった。どうか許してくれたまえ。少しでも君のことを疑った自分が恥ずかしいよ。僕は君と一緒に暮らしていても楽しかったんだ。これからも僕は君と一緒にくらしてゆきたいんだよ。」

それから彼等は前と同じ場所に一緒に仲良く暮らし続けた。ジャッカルはこそそと逃げ出してどこかにいつてし

まった。

〔結び〕

世尊は、過去の前生を現在に結びつけて言われた。

「その時のジャツカルは、食べ物残り物をもらう男であり、ライオンは舍利弗尊者しやりほつそんじやであり、トラは目連尊者もくれんそんじやであった。そして、その時の様子をじっとそのまま見つめていた大木の精霊せいれいが実は私だったのだよ。」（散文を含むジャータカはこのような形式で書かれている。パーリ語の仏教聖典のジャータカには、太字で書かれている部分の歌のみが伝承されている。散文の部分は、注釈である。）

この話は、ライオンとトラの寓話ぐうわであるが、私たちの現実の世界でよく起こる光景である。面白いのは、釈尊しやくそんの前生は木の精霊であった、というところである。物語のなかで木の精霊は何にもなさずにあるがままとだじつと見ていただけである。これは仏教の仏の姿を象徴しているように思われる。実に透き通った眼でこの世を見ている。しかも必要な時に、我らに恵みを与えたり、我らに救いをもたらしてくれたりしている。

この物語に触れて我々は、我が身に置き換えて自分と友との関係を思う。人々は自分も友人にこのように接しようと思ったり、自分の行いを反省したりするであろう。ジャータカにはこのような話がたくさん入っている。

またジャータカの特徴は、「現在物語」の部分に「以前にも同じようなことがあった」として「過去世物語」が語られるところにある。

ジャータカの例話2 ジャータカ一九六

空飛ぶ馬（ヴァラーハッサ） ジャータカ（Valāhassajātaka）

〔現在物語〕

釈尊がジェータ林に滞在しておられた時、着飾った女性に思い焦がれて修行がいやになった修行僧がいた。そこで釈尊は彼に「以前にも女性に迷って命を失ったものがいたのだよ。」と言って過去のことを話された。

〔過去世物語〕

〔女夜叉の本性〕

昔、タンバパンニ島にシリーサヴァットウという名の夜叉の町があった。そこには女夜叉が住んでいた。彼女達は、難破船が漂着すると、着飾り準備して色々な食べ物を持ち、侍女達を従え、子供たちを腰で抱えて、商人たちに近づいた。彼らが、「自分たちは人間の住むところに流れ着いたのだ」と気づくようにそこそこに耕作をしたり放牧をしたりする人々、牛の群れ、犬というものを見せた。そして彼女達は、商人達のもとに行って、「このお粥を召し上げ。食事を召し上げ。つまみものを召し上げ。」と言った。商人達は知らずに彼女達が出してくれるものを喜んで食べた。それから彼らが食べ終わって休んでいる時に、親しく話をして、「あなた方はどこにお住まいですか。どこから来られたのですか。どのようなお仕事で来られたのですか。」と尋ねた。

「私たちは、船が難破してここに流れ着いたのですよ。」

彼らがこう言った時、「そうでしたか、私たちの主人も船に乗って出かけていってから三年が経ってしまったのです。」

彼らは死んでしまったのでしよう。あなた方も商人です。私たちはあなた方の傍にお仕えいたしましょう。」と彼女達は言った。

そして彼女達は、この商人達を女性特有の媚態と戯れとで誘惑して夜叉の町に連れて行つた。もしも先に捕まえた人たちがいたなら、その人達を不思議な鎖で縛つて牢屋に投げ込んだ。そして自分の住んでいる場所に難破船がない時には、遠くではカルヤーニー河に、近くではナーガ島に、というように歩き回つた。これが女夜叉達の本性である。

「女夜叉の島に漂着した商人達」

さてある日、五百人の難破船の商人達が女夜叉達の町の近くに漂着した。彼女達は彼らのもたに行つて誘惑して夜叉の町に連れて行つた。そしていつものように先に捕まえた人々を不思議な鎖で縛つて牢屋に投げ入れた。女夜叉の首領が商人の隊長を、残りの女夜叉達は残りの商人達をというようにこれら五百人の女夜叉達はこれの五百人の商人達を自分の夫にした。

それからこの女夜叉の首領は夜に商人が眠つた時に起き上がつて出かけて牢屋で人々を殺して肉を食つて戻つてきた。残りの女夜叉達も同じようにした。女夜叉の首領が人間の肉を食つて戻つてきた時、体が冷たかった。商人の隊長は抱いて冷たいのを感じて、彼女が夜叉であることを知つた。そして

「この五百人も女夜叉であろう。我々は逃げなければならない。」

と思つて、明くる日早く顔を洗うために出て行つて残りの商人達に告げた。

「この女達は人間ではないよ。ほかの難破船の者達が漂着したならば彼らを夫にしまい我らを食つてしまふだろう。さあ、我々は逃げよう。」と言つた。

すると五百人の内の二百五十人は言った。

「私たちは彼女達を捨てることはできません。あなた方は行かれたらよいでしょう。私たちは逃げません。」
商人の隊長は、自分のことばに従う二百五十人を連れて女夜叉達を恐れて逃げ出した。

〔空飛ぶ馬（雲馬^{うんめ} = valāṁśa）の出現〕

その頃、空飛ぶ馬がこの世に生れていた。全身が真っ白で、頭が黒く、たてがみはムンジャ草の色をしており、超能力をもち、空を翔ることができた。

その馬は、ヒマラヤ地方から空中に飛び上がってタンバパン二島に行った。そここのタンバパン二湖の泥沼に自生する稲を食べていくのである。このように進みながら

「人間のすみかに行きたい人はいませんか。人間のすみかに行きたい人はいませんか。」
と三回あわれみ（悲心）に満ちた人間のことばを話した。

商人達は、空飛ぶ馬のことばを聞いて近づき、合掌して言った。

「私たちは人間のすみかに帰りたいのです。」

「それでは、私の背中に乗りなさい。」

するとある者たちは背中に乗り、ある者たちはしっぽにつかまり、ある者たちは合掌したまま立っていた。空飛ぶ馬は、合掌したまま立っている者にいたるまで全て二百五十人を自分の力で人間のすみかに連れて行き、それぞれの住いに落ち着かせた。そして自分の住いに戻って行った。

あの女夜叉たちは、別の人たちが漂着した時にそこに残っていた二百五十人の人々を殺して食べた。

「結び」

釈尊は修行僧たちに仏の教えに従うことが大切だということを教えて言われた。

「仏が説かれた教えに従わない人々は

破滅におちいるであろう。

ちようど商人たちが女夜叉たちによって破滅におちいったように。

仏が説かれた教えに従う人々は

彼岸の幸福におもむくであろう。

ちようど商人たちが空飛ぶ馬によって幸福におもむいたように。」

その時の空飛ぶ馬に従った二百五十人の商人たちは、今の釈尊の弟子であり、空飛ぶ馬が釈尊であった。

「まとめ」

私たちはこの世に生きている限り、苦しみがつきまとう。このような苦しみから何とかして抜け出したいと思い、苦闘しながらもがけばもがくほど苦悩のぬかるみに、はまってしまうのが人生だとつくづく思う。

この空飛ぶ馬の話を読んで次のように思った。

この商人たちが漂着した女夜叉の島というのは、実は、我々が今生きているこの世界を指しているのではないか。気をつける生活をしないで自分の欲の赴くままに行動すると大変な事に出会うことがある。そのような危険な場面に自分達は居るにも拘わらず、その事になかなか気付かないでいる。そっちは危ないよ、こっちの方がいいのだよ、

こつちにきなさい、とたとえ教えられても今の場所に執着してそれを改める事ができない。この話は、そういうことを示唆しているように思われる。だから仏教の教え（仏法）に耳を傾けなければならないよと教えているように思われる。

我々の世界には、色々な苦悩に悩む人々が多い。自分自身も苦しみの中にいてそのような人々を引き上げるとは至難の技であると思う。身体の苦痛、心の苦悩、子を失った悲しみ、破産の苦、老苦、病苦、自分が死に行く時の苦と恐怖、というようにこの世界は苦悩に満ちている。このような人々を苦しみから引き上げる時、即ち悲の実践を行うにはどうするのだろうか。

釈尊は、可愛いわが子をなくして気が狂ったようになっている母親に対して決して人情に訴えるようなことばで慰めることはしなかった。実に非情とも言えることばを母親に投げかけている。「わが子を亡くして泣いた母親の涙は、この地球上の四大海にもなるほどだ」とか、「お前さんの子供と同じ名前の子を焼き場で焼いた回数は八万四千にもなるが、どの子供のためにお前さんは泣いているのか。」などと、人間は必ず死ぬのだということを自ら身を以てわかるように經典の中で述べている。

(三) 『六度集經』中の本生話

一・『六度集經』の意味

ジャータカの分類には色々な方法が考えられる。例えば仏教の修行の実践方法である六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）に物語を分けて考えることもできるであろう。また釈迦の前生が人間になっていた場合、

動物の場合、神の場合というように分類することもできるであろう。英雄伝説、王統伝説、昔話、修行者伝説等に分類することもできる。『六度集経』の中の本生話は、六種の波羅蜜の実践方法に従って修行を行なった菩薩の姿を述べている話の集成書のことである。

二、『六度集経』の題名について

この経典は、別名で『六度無極経』^{どむごく}ともいわれる。「度」とは、「救う」^{すく}とか、「わたる」という意味もあり、「済度」^{すく}、「度脱」^{どたつ}、「度し難い」などのことばの意味におなじで、「六度」は「六波羅蜜」という意味である。だから『六度集経』は、六波羅蜜の話を集めた経典に当たるといわれる。即ち、「六波羅蜜」とは、布施波羅蜜、持戒波羅蜜、忍辱波羅蜜、精進波羅蜜、禪定波羅蜜、智慧波羅蜜のことで、大乘仏教の菩薩の修行徳目のことである。「波羅蜜」とは、「到彼岸」「悟りに至る」の意味である。『六度集経』の中では、布施度無極章、戒度無極章、忍辱度無極章、精進度無極章、禅度無極章、明度無極章の項目が挙げられていて、その中に釈尊の前生話である九十一の本生話^{ほんじょうわ}が語られている。そして明度無極章を除くそれぞれの章の初めには、解説が述べられている。

第一の布施度無極（布施によって悟りの世界に至る）章では、「人や物を慈しみ育て、もろもろの邪なものを憐れんで、賢者を喜び、救いを成し、衆生を助け救い、天を跨ぎ地を踰え、広く河海を潤し、衆生に布施する。誰かが求めたならばただちに恵み与える。ちょうど親が子を育てるようである。」という内容の物語がおさめられている。

第二の戒度無極（戒によって悟りの世界に至る）章では、「仏法僧の三宝を深く信じて、四恩（仏、法、沙門そして親への恩）を行い、人々を普く救済すること」を述べている。

第三の忍辱度無極（忍辱によって悟りの世界に至る）章では、「耐え忍ぶことができないことを耐え忍ぶ、諸仏の忍力の福によって衆生を救い護ること」について述べている。

第四の精進度無極（精進によって悟りの世界に至る）章では、「精神を集中して道の奥義を考え、それを推し進めて怠ることがなく、行住坐臥、ほんのしばらくの間も捨てることのないこと」について述べている。

第五の禅度無極（禅によって悟りの世界に至る）章では、「心を正し、意識を専一にし、多くの善を全て合わせて、意識を専一にし、多くの善を全て合わせて、自分の心の中に止める。諸々の穢れや悪を意識すれば、善によってこのけがれや悪を消滅させること」について述べている。

第六の明度無極（明によって悟りの世界に至る）章では、説明は見られないが、「真実の明智みょうちによって、欲を止め心を空にして、神（靈魂）を本無に還すことができる」ことが語られている。この境地は、悟りの境地を指しているかと思われる。

三、『六度集經』作者 康僧会について

康僧会こうそうえは、康居国（トルコ系遊牧民族が建てた西域の名。現在のカザフスタン南部）をルーツにする人で、僧侶の会という名前である。後漢の安世高訳『仏説大安般守意經だいいんぱんしゅいぎょう』に序文を書いていることが示されている（大正一五、一六三頁）。『六度集經』九巻及び呉品五巻について、『出三藏記集しゅつさんざうきしゅう』巻第二に天竺沙門康僧会訳出と書かれている（大正五五、七頁）。

僧会の先祖は、代々インドに住んでいたが、父の商売の関係で呉國の属国のベトナムの交趾（ハノイの北東三十キ

口のバクニン、北ベトナムの文化と経済の中心地）に移り、僧会は、仏教を江南に広めたいとして二四七年に建業（南京）に移った。この地の為政者孫権は、建初寺を建立した。僧会は、仏教と道教の本質は同じものであると捉えていたと思われる。

四、『六度集経』中の例話

一、戒度無極章 第三十三話 貧商人本生²

昔、貧しい生活を送る菩薩がいた。彼は、商人の賃雇いになり、船に乗って海に出かけ、自分に必要なものを採取して生活していた。ところが海上で船が止まり動かなくなってしまった。船上の商人達は、皆恐れ慄き、天地の神々を仰ぎ、救いを求めた。

その時、仏、法、僧の三宝に深く帰依し、戒めを固く護っていた菩薩は、自らの過ちを懺悔して慈しみの心で「私が後に仏になって、十方の衆生を済度できるように」と誓願をたてた。その後七日過ぎても、船は動かなかった。海神が、貨物船の主の夢に現れて「あの貧しい男を船から捨てれば、自分はここから去るよ」と言った。菩薩がそれとなく気づいて船主に、「船の中の多くの人を救うように」と言ったので、船主は筏に食料と菩薩を乗せて、海の上においた。

一方、大魚が商人達の乗った船を転覆させ皆、海の藻屑になってしまった。

しかし筏に乗った菩薩は、風のままに進み、自分の家に帰ることができた。菩薩は、三帰依（三宝に帰依すること）・五戒・十善戒を守り、慈悲の心を衆生に向ける生活を行った。

二、忍辱度無極章 第四十二話 菩薩本生

昔、菩薩は、世の中は汚れ、君臣共に道に外れた行いをし、真実に背いて、邪な道にむかつており、教え導くのに困難であると思った。そこで、本当の自分の姿を隠し、墓の間に止まり住んで、耐え忍ぶ忍辱の行いをしていた。墓の間には、仔牛がいた。彼はいつも仔牛の糞と尿を取って、それらを飲食にし、自分の命をつなぎ、風雨にさらされながら、瞑想をしていた。

菩薩の顔は黒くて醜く、人は皆、これを嫌った。国の人々は菩薩の姿を見ると、皆んな、「この国には鬼がいる」と言った。

菩薩の姿を見た者は、皆唾を吐いて罵り、土や石で菩薩を打ち叩いた。菩薩は少しの怒りをも起こさず、慈しみの心で哀れんで言った。「何とかわいそうなことだ。この人たちは、仏教の経文を見ることなく、このような悪いことをしているのだ」と。そして誓って言った。「私が、如来として悟ったならば、必ずこの人たちを済度する」と。

菩薩は、無生法忍^{むじょうぼうにん}によって悟りの世界にいたった。忍辱を行うことは、このようである。

(四) タイ所伝『パンニャーサジャータカ(五十ジャータカ)』

十五、六世紀頃、タイ国のチェンマイ在住の沙弥が、当時タイに伝わっていたジャータカと称される物語をパーリ語で編纂したとされるものである。タイでは、チェンマイジャータカとも呼ばれている。

東南アジアに流布されているパンニャーサジャータカ(五十ジャータカ)については、それぞれ異なった形で伝えられたと見られ、クメール文字・パーリ語によるクメール写本の系統、ビルマ文字写本のもの、ランナー文字による

もの⁴の三系統が知られているが、ここでは、クメール写本系統のものをとりあげてみる。
クメール写本系統のパンニャーサジャータカは、次の通りである。

一 Samuddaghosa⁵ātaka, conte Pāli tire du Paññāsa⁶ātaka, par G. Terral, BEFEO Tome 48 1956 作成に使われたもの。

a ハノイ写本のマイクロフィルム（一〜四十四話）

b フランス国立図書館所蔵写本三種

c プノンペン⁷の仏教協会から一九四四年に出版された、クメール文字によるテキスト（一〜五話）

二 著者による「Paññasa⁸ātaka 中の Samuddaghosa⁹-jātaka」（『平川博士古希記念論集仏教思想の諸問題』昭六十所収）、
「アティデーヴァラージャ・ジャータカ」（『成田山仏教研究所 紀要 第四十六号』、令和五所収）、「タイ所
伝『五十ジャータカ』中のスタダヌジャータカ」（『成田山仏教研究所紀要 第四十七号』令和六所収）、「タイ
所伝『五十ジャータカ』中のスタダヌジャータカ（二）」（『成田山仏教研究所紀要 第四十八号』令和七所収）
等のテキスト作成に使用したもの

a. 著者将来のタイ国バンコク市国立図書館所蔵クメール写本のコピー

（A、B、C 写本は、近い内容なので、ここでは、A 写本のみを記すにとどめた。）

a-1. A 写本

1. Samuddaghosa¹⁰ātaka (091-098TIF), 2. Sudhanakumārājātaka (111TIF), 3. Sutadhamujātaka (124TIF), 4. Ratanapajotājātaka (129TIF),

5. Sīripullakīrtijātaka (134), 6. Vipullarājājātaka (135TIF), 7. Sīrucuddhāmañ-jātaka (138TIF), 8. Candarājājātaka (143TIF),

9. *Śrīdharajātakā* (49TTF), 10. *Sumbhamitajātakā* (50TTF), 11. *Saśbasiddhijātakā* (53TTF), 12. *Dullākaparṇijajātakā* (59TTF), 13. *Āditarājajātakā* (160TTF), 14. *Dukammāṇkajātakā* (169TTF), 15. *Mahāsurasenajātakā* (170TTF), 16. *Suvannakumārājātakā* (180TTF), 17. *Kamakarājajātakā* (181TTF), 18. *Vīriyapajātakāparṇijajātakā* (186TTF), 19. *Dhammasoṇḍakajātakā* (188TTF), 20. *Suddasannamahārājajātakā* (189TTF), 21. *Vatthāṇḍulīrājāsuttavannaṇā* (193TTF), 22. *Dhammikaparṇijajātakā* (220TTF), 23. *Cūḍadānājātakā* (201TTF), 24. *Dhammarājajātakā* (202TTF), 25. *Narājijajātakā* (206–207TTF), 26. *Surtipajātakāvannaṇā* (209TTF), 27. *Mahāpadumnejātakā* (214TTF), 28. *Bhaṇḍāṭṭarākājātakā* (219TTF), 29. *Bahālāgavijātakā* (222TTF), 30. *Setapanḍitajātakā* (224TTF), 31. *Pupphajātakā* (227TTF), 32. *Bāṭṭasāṭṭhājātakā* (228TTF), 33. *Brahmaghoṣajātakā* (232TTF), 34. *Devanukkhakumārājātakā* (234TTF), 35. *Siābhajātakā* (228TTF), 36. *Siddhisārājātakā* (241TTF), 37. *Narājivakā* (244TTF), 38. *Aṇḍevārājātakā* *kaṇṭhina-dānannitthi* (246TTF)
- a-2. E写本（E写本は、後半の部分である。）

Pañāsajātaka phūk (003TIF)

1. Siddhisrajaṭīakam(006TIF), 2. Naraṇṇakathinajaṭīakam(008TIF), 3. Pectitakumṇajaṭīakam(015TIF), 4. Sabboasiddhiṇṇajātakam (017TIF),
5. mahāsampāpattajaṭīakam(027TIF), 6. Candhasenaṇṇajātakam(032TIF), 7. Suvannakacchapajātakam (033TIF), 8. Sisorajātakam (042TIF),
9. Varavamsajātakam(040TIF 以下書名にㄱㄷ) 10. Rathasenajātakam (056TIF), 11. Suvannasirasajātakam (066TIF),
12. Vammāvajātakam (084TIF), 13. Bākulajātakam(093TIF)

b. タイ所伝 **Paññāsajātaka** 中の例話

Sudhanajātaka の内容

〔現在物語〕

托鉢中に美しい婦人に心を奪われた比丘に対して、世尊が「解脱の教えのもとに出家したにもかかわらず女性への執着が続く比丘に対して、過去にもそのような出家者がいた」と言われて過去の出来事を述べられた。

〔過去世物語〕

一 北パンチャーラの町とマハーパンチャーラの町

1. 年々豊作の北パンチャーラの町と年々凶作の東方の町マハーパンチャーラ

北パンチャーラの町の王夫妻にスダナ王子が生まれた。王子は、弓術などのあらゆる技術を習得し、帝釈天のような徳相を持つ王子である。

北パンチャーラの町では、蓮池に棲むジャンブーチッタという名の竜王が棲んでいてそのお陰で毎年豊作であったという。しかし隣町マハーパンチャーラは、年々凶作で多くの人々が町を離れていったという。

2. 竜王殺害を願うマハーパンチャーラ王

竜王のせいで豊作の続く北パンチャーラの町に嫉妬したマハーパンチャーラ王は、呪文 (paritta) 読誦で竜王を殺そうと願い、呪文読誦にすぐれた婆羅門を探し出した。この婆羅門は、竜王の池で薬草を探して左手に持ち、右手を差し出して呪文となえて岸辺にたつてみた。呪文の威力で池の水が煙とともに噴き上げ出した。

二 婆羅門に変身した竜王と竜王を救う獵師そしてキンナラ王の娘マノーハラー

1. 自分が呪文によって殺害されることがわかった竜王は、婆羅門の姿に変身して池の岸に立っていると、一人の獵

師が獲物を求めてやってきたので声をかけ、経緯を説明し、竜王殺害の呪文を解くことを依頼する。

2. 獵師、雪山山中でカッサパ仙人に会い、蓮池で美しいキンナリー達を見る。

雪山の仙人から教えられ、獵師は、雪山、ケーラーサ山のドゥンマ王の娘のキンナリー達に会う。獵師は、竜の輪繩を手に入ればキンナリーを捕獲できることを知り、竜王から竜の輪繩を手に入れ、雪山の仙人の蓮池で水遊びし舞い歌うキンナリー達を見て竜の輪繩を投げ入れてキンナラ王の娘マノーハラーを捕まえる。他のキンナリー達はケーラーサ山に戻り、マノーハラーが人間の手に陥ったことを彼女の父母に伝える。

3. 獵師、菩薩スダナ王子の召使にするために、

マノーハラーを連れて雪山に入り、北パンチャラに行く。

獵師は、マノーハラーをスダナ王子に与えた。スダナ王子、マノーハラーに会い、激しい愛情を抱く。王子が父王に伝えると、父王は、持明族(vijādhara)王の娘を王子の妻として得たことを喜び、莊嚴して彼女を町に迎え入れ、盛大な婚礼を行い、彼女を皇太子妃の地位につけた。

4. マノーハラーの姿を捜す母の姿

一方、マノーハラーの母親は、娘を捜すのに蓮池や遊び場で、娘マノーハラーの姿を狂ったように髪振り乱し足跡を求めて、雪山に近づきあちこち探し、彼女の帯を見つけそこで嘆き悲しんだ。持明族のキンナリー達は泣き悲しんだ。

五. 辺境の地の動乱鎮圧

1. スダナ王子の出兵

辺境の地に動乱が起こり、父王は、スダナ王子に鎮圧するように命令した。大軍隊に伴われてスダナ王子は出陣した。街から出ていく瞬間に、町の守護神達が互いに喚声をあげた。

2. 生贄を伴う祭祀の実行を知り、王子の母妃、マノーハラーを逃す。

王子の留守の間に災いを引き起こすような生贄を伴う祭祀を行うことになり、キンナリーを生贄にすることが決まった。母妃は、マノーハラーを逃すことを心に決め、スダナ王子の留守の間に預かっていたマノーハラーの二つの翼を彼女に渡して、マノーハラーをケーラーサ山に帰すことにした。

マノーハラーは、カッサパ仙の庵に行き、毛織物と自分のダイヤモンドの指輪を渡し、これと一緒に葉草と守りの呪文の粒を、スダナ王子に渡すように頼み、ケーラーサ山の父の下に向かった。

六 スダナ王子、辺境の乱を治めて町に戻る。母がマノーハラーがいらないことを告げると、王子は、彼女を探し求めて獵師を道案内にして、カッサパ仙の下に出かけた。

七 カッサパ仙、マノーハラーの頼み全てをスダナ王子に伝える

カッサパ仙人は、マノーハラーから頼まれた言葉、ダイヤモンドの指輪、赤い毛織物をスダナ王子に渡して、マノーハラーの棲み家への行き方を伝え、猿を道案内にして、マノーハラーの言葉全てをスダナ王子に話した。

スダナ王子、子猿を伴い、北に向かい、カッサパ仙人に別れを告げる。

八 マノーハラーをさがし求める菩薩の長い道中

スダナ王子（菩薩）は、七年七ヶ月七日、森を進んだ。夜叉王を倒し、川を渡り、大蛇の背中に上って、籐の木にぶら下がり、猿のように木に飛び上がり、籐の林に止まった。一羽の鳥が「ケーラーサ山のダウンマ王の町に、人

間に捉えられていたマノーハラーという娘が戻ってきた。」というのを話すのを聞いた。

菩薩は、大鳥の翼の中に入って、空中を飛び、町を通り過ぎて池の下に降りた。その水汲み場でマノーハラーのことを語っているのを耳にした。それでマノーハラーが自分がここに来ていることを分かるように祈ろう、と思った。

九 真実の誓いにより、マノーハラーに再会する

菩薩は、真実の誓い (saccakiriya) をして、「持明族の娘達の一人が水瓶を持ち上げるように」と願った。すると、自分の水瓶を持ち上げることでできない持明族の娘の一人が菩薩に持ち上げてくれるように頼んだ。その時菩薩は、水瓶の中に指輪を投げ入れた。例の持明族の娘は、王女マノーハラーの沐浴のために菩薩が投げ入れた指輪の入った水瓶の水をマノーハラーの頭に注いだのである。マノーハラーは、自分の夫の指輪を見つけ、夫が、ここまでやってきていることを知る。彼女は、自分の夫が自分を探し求めてこのケーラーサ山にまでやってきていることを父王と母妃に告げた。

十 菩薩、キンナラ王ドゥンマに謁見し、御前で不可思議力を披露する

ドゥンマ王は、菩薩に対して菩薩の力を試させた。持明族の大衆及び全ての神々は、菩薩を褒め称えた。

十一 菩薩、百人力で持ち上げる岩を一人で持ち上げる。さらに七人の同じ姿をした娘の中から決定波羅蜜 (adhiṭṭhanapārami) によって、真実のマノーハラーを見出す。

次にドゥンマ王は、同じ姿をした七人の娘達の中から本物のマノーハラーを選ぶようにと命じた。ついに菩薩はマノーハラーと共に自国に戻ることができた。

インドで書かれた『ジャータカ』、漢文で書かれた『六度集経』、タイに伝わる『パンニャーサジャータカ』を学ばせて頂くご縁に恵まれて、「ジャータカ」「本生話」とは、その時代を背景に、その地域と場所に生きて生活している人々の生き方、人々の交わりの様子、及び生き様が生き生きと語られている話であり、そしてその中で過ちなく生きることを教えてくださる菩薩のお姿の話であると知らせて頂きました。このご縁を深く感謝します。

注

- 1 vamaññota の意味は、PTS's Pali English Dictionary で、²⁴ extent of beauty、水野弘元著『パーリ語辞典』では、「優秀さの高さ」とある。
- 2 『六度集経』p.169 参照。
- 3 不生不滅の法性を悟って決定安住する位。
- 4 *A critical Study of Northern Thai Version of Panyasa Jataka*, edited from Univ. of Cularongkorn, 1998.